

「シネマ游人」創刊号への言葉

今春に創刊号を発行してから、映画関係者の諸先輩から、励ましや温かいコメントをいただいた。お礼かたがたその文面を紹介する。

岡田 裕 プロデューサー

「ご無沙汰しています。「シネマ游人」送っていただけて有難う。どうか長続きさせて、ユニークな映画話を読ませてください。」

小谷承靖 映画監督

紙の文化がどんどん消えていく中でのこと。ご苦勞いろいろおありでしょうが、ともかくオメデトウございます。〈持續する志〉でがんばってください。「シネマ游人」のベストテン品位のあるチョイスだと思いました。私は個人的には『海街diary』ですね。

十河進 作家

「シネマ游人」お送りいただきまことにありがとうございます。楽しく読ませていただきました。吉村さんのフランス映画とハリウッドの良心派の映画に関する文章にも気付かされるところがあり、興味深いものでした。映画評もユニークな視点があり参考になりました。『妻二人』を取り上げているのは、嬉しい限りです。増村ファンは多いのだと我が

意を得たりです。皆様、年季の入った映画好きとお見受けいたします。改めてありがとうございます。

「映画がなければ生きていけない」著者

長田紀生 脚本家・映画監督

「シネマ游人」拝読しました。短い文章の中に筆者の方々の映画への思いが、ちりばめられていて、面白く読ませてくださいました。長い歳月、ただ映画を見て来たのではなく、見つめてこられた賜物と思います。映画を見つめることが、人間と世界を見つめることに深くつながっていることを、あらためて感じました。翻って、現在の日本映画の制作現場は、何を見つめているのか……うそ寒い感、しきりです。

平山秀幸 映画監督

この数年の映画の変化はすさまじいものがある。フィルムはデジタルに、サウンドは5・1チャンネルどころか9・1チャンネルを目指し、画像は3Dをはるかに通り過ぎ……猫も杓子もアトラクション化してゆく。批評や評論も時代と共に変わっていくのだろうか。「シネマ游人」が数年後、その答えを担うことを願う。